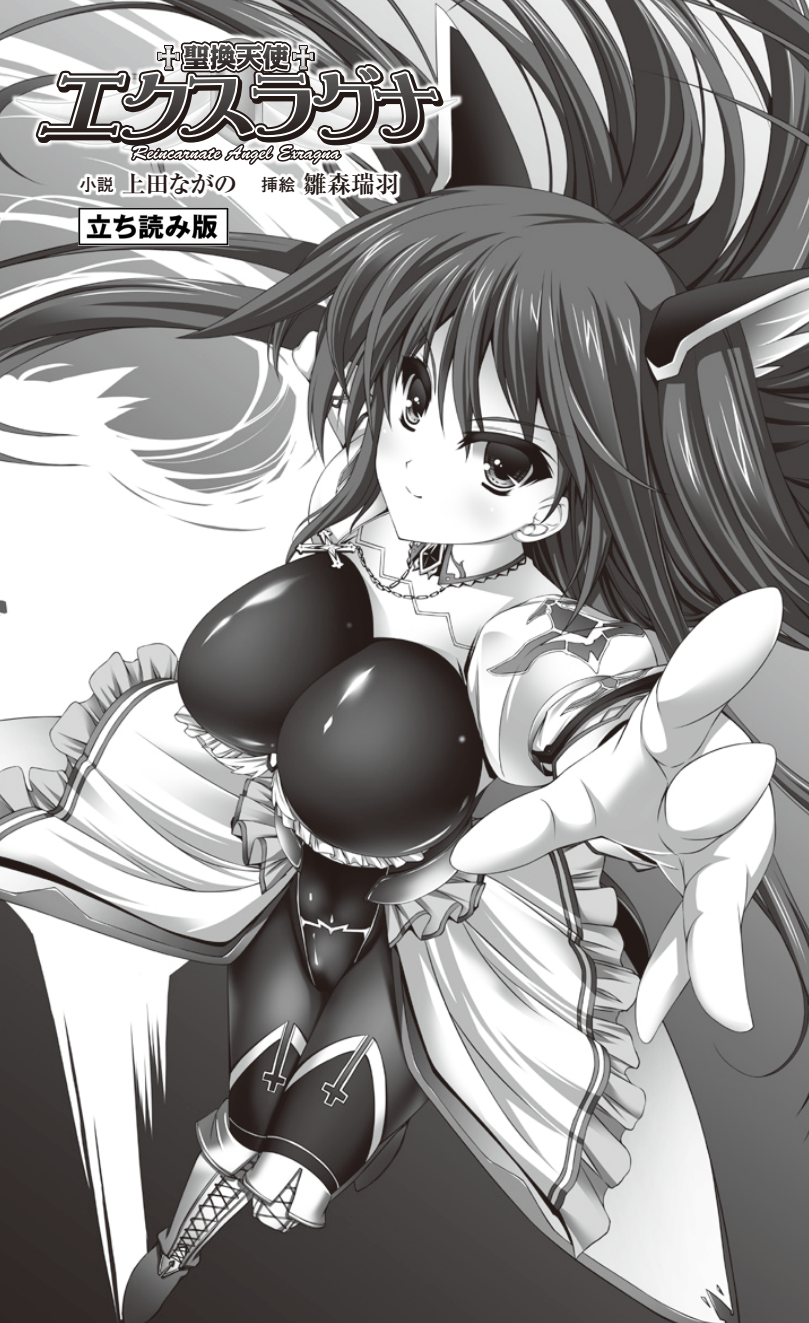


十聖換天使十
エクスラグナ
Reincarnate Angel Exaguna

小説 上田なかの 挿絵 雛森瑞羽

立ち読み版



第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話
輪廻	継続	淫獄	日常	喪失	代償	天使

登場人物紹介

Characters



くろかわ
黒河ヒツギ

人間の精気をエネルギーにして無限の力を発揮する“聖換天使エクスラグナ”に変身し、人類の敵EPと戦う少女。



こうさか
高坂レイ

かつてヒツギに命を救われた少女。EPに犯されまくった影響で得た『魔殺天使』の力で復讐の為に戦っているボーイッシュな少女。



こうさか
高坂リナ

レイの双子の妹で、同じくヒツギに助けられた少女。姉とともに『魔殺天使』に変身して戦いに身を投じている。

きぬがわしょうすけ

絹川昭介

ヒツギの着用する“聖換衣”を開発した研究者。かつてヒツギの両親とともにEP討滅のために心血を注いだが……。

「これは僕が研究で作った妖魔だよ。EPの生態研究の産物。こ、こいつは女の汚物を喜んで食べるように調整してある。女の汚物を食べ、それをエネルギーに変換。でもってそれをお、女の身体の中に流し込むんだ。つまりうんこをエネルギーに変換するというわけ。あ、ある意味永久機関だと思わない？」

ウエヒヒッとこらえきれない様子で笑う姿はどこか得意げだ。

「そ、それを使ってどうするつもりよ？」

「か、簡単なことだよ。エネルギー補充の補助に使う。き、君のうんこを喰らわせて、それをエネルギーに変えるんだ。みんなを守る為だから我慢できるよね」

どういう言葉を向けるのが効果的なのか、完全に把握されてしまっている。

（もともと拒否権なんて私にはない……）

「……好きにすればいいわ」

「そうこなくっちゃ！」

どんな答えをヒツギが出すか分かっていたくせに、本当に嬉しそうに手を叩いて喜ぶ。余計癪に障る反応だった。

「じじ、じゃあいくよ」

パチンッと絹川は指を鳴らす。するとどういいう仕組みになっているのか分からないけれど、触手達が一斉に蠢き始めた。グロテスクな生物が跪くヒツギの下半身に取り憑く。

「くっ！　ううっ」

ベチャリツと太股に蟲^{むし}が張り付いた。感触は生温かい。吸盤のように肌に吸い付いてくるのが気持ち悪かった。しかも、取り憑くのは一匹だけではない。蟲の数はどれくらいいるのか数えきれない程だ。それらすべてが、聖換衣^{せいぐんぎ}の上を這いずり始める。

（気持ち悪い……）

湧き上がる嫌悪感に、身体が硬直してしまう。

「ほら、こつちも休んじや駄目！ めっでしょ！」

しかし固まっていることは許されない。絹川が腰を突き出し、ペニスで頬を撫でてきた。ニチャツという感触が伝わってくる。

「ひっ……く、わ、分かっているわ……」

一瞬悲鳴を漏らしてしまうが、すぐに冷静さを取り戻す。弱った姿を見せたくはない。なんでもない風を装いながら、口を開いて肉棒を咥えた。

「んもっ……んむうう……」

口腔にペニスの熱気が広がる。

（熱い。不味い……でも、これを射精させる。そう、射精させれば終わるのよ……）

自身に言い聞かせることで心を落ち着かせながら、ペニスに舌を這わせた。

（手で扱けば射精した。だから……口で扱けばいいのよね）

これまで何度か行ってきた手扱きの記憶を思い出し、それをもとにどうすればいいのかを考える。

「ふう……なかなかいいよ。ど、どうすれば男が喜ぶのか、分かっているんだね」

唇を窄めて肉茎を締め上げると、絹川は嬉しそうに瞳を細めた。その姿さえも不快だったが、どうやら間違いいではないらしい。

（さっさと終わらせる……）

汚辱の時間は一分一秒でも短くしたかった。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ……。

顔を前後に振り、口唇で肉棒を扱う。

「んふっんふっ……んじゅっ、ふぶう」

時には舌を動かし、肉茎を締め上げたりもしながら、奉仕に意識を専念させた。

「上手いなあ。初めてとは思えないよ。この辺は血筋かな？ お、音羽も初めからフェラ

が上手かったもん。でも……彼女の場合は散々敏夫のチンポを舐めてたつてのもあるかもしれないけどね」

気持ちよさそうな表情を浮かべつつ、思い出話を口に出してくる。

（いな。そんなの私に聞かせないでよ）

両親の秘め事など聞きたくない。できることなら耳を塞ぎたかった。

（早く終わらせる。すぐに射精させる）

それだけを考えるようにし、奉仕に集中する。

が、変化はこの時起きた。

「んひっ！ あ、な、何？」

下腹部に刺激を覚える。思わず肉棒を離して下半身へと視線を移すと、一〇匹の蟲達が衣装の隙間から内部に入り込み、肛門に頭を押しつけてきていた。

「お、ちよっ……あっあつ、駄目。な、何を？ 何をするつもりよ？」

蟲が肛門を押し開こうとしているのが分かる。

「何って……いったでしょ？ そ、そいつらは君のうんこを食べるんだよ。尻の中に潜り込んでね」

「お、お尻の中って……でも……」

改めて現実を突き付けられると、血の気が引く。尻は異物を注入する部位ではない。排泄の為だけの器官のはずだ。

「エネルギー補充の為だ」

「——う」

言葉に詰まる。

刹那——

ぐぶじゅっ、じゅぐぶるるう。

「うあつ！ あ、は、挿入ってきた。お、お尻の中に挿入ってきた……んんん」

肛門が押し開かれる。身体の中に生温かいものが潜り込んできた。

「う、ま、また！ また来たあつ」

しかも一匹だけではない。二匹、三匹とすべての蟲が肛門を拡張してくる。

「は、挿入らない……。こんなに挿入らないわよ」

無意識のうちに異物の侵入を拒絶しようと、括約筋に力を込めてしまったが、その程度ではどうしようもなかった。

（広げられる。私のお尻が広げられてく……）

七匹、八匹、九匹、一〇匹——数えきれないほどの蟲が肛門内に潜り込む。

「あ、中で動いてる。うう、外でも……」

しかも、腸内に入りきらなかった蟲が、身体中を這い回り始めた。肌を吸引し、吸ってくる。二の腕、腰、太股、そして乳房——全身を触手に搦め捕られていた。

じゅずつ！　びじゅるるるつ！

「んあつ！　な、なにっ!?　す、吸ってる！　わ、私の中で何か吸ってる!？」

吸引行動は直腸内の蟲も行ってくる。

「だから、今そいつらは君のうんこを食べているんだよ。ウエヒヒヒ」

「う、うんち……」

あまりに屈辱的な言葉だった。

（食べられてるの？　わ、私のうんちが……）

じゅずぶつ！　ぶじゅるるるつ！

心の声に應えるように吸引が激しさを増す。ギュルルツと下腹部が下品な音を奏でた。

「んっ、くふうっ！ んんんん」

途端に全身が痺れるような刺激が走る。ビクンッと身体が震えた。

（な、何？ この感覚は何？）

ジンジンと下腹部が疼くのを感じた。

「そ、そいつらは吸引と引き替えに女の身体に快楽を与えてくれるんだ。すす、素晴らしい代償でしょ？ どう？ き、気持ちいい？」

フーフーと鼻息を荒くしながら尋ねてくる。

「き、気持ちよくなんかないわ。あ、あり得ない！」

即座にこの言葉を否定した。そう、エネルギー補充で快楽を覚えるなどあつてはならないことなのだ。これは世界を守る為に必要な行動でしかないのだから……。

（母さんに軽蔑される。それだけは絶対に嫌）

母はこれに耐えてきた。だから自分も耐えなければならない。

そう自分に言い聞かせながら、全身を内臓まで犯されつつ、再びペニスを口に咥えた。

（とっとと射精させて、こんなのは終わらせる）

強く念じながら、チュバチュバと自然に鳴ってしまう下品な音を奏でながら、肉茎奉仕に集中した。

射精させる——ただそれだけを一心に考える。

じゅぶずるるるっ！

（くっ！ 食べてる。うんち食べてる……あ、熱い……お尻の中が熱くなる……）

けれども蟲によつて意識は乱されてしまう。口奉仕を続ければ続けるほど、これに比例するように直腸吸引も激しさを増していた。

ぎゅるっ、ぐぎゅるるるう。

（お腹が鳴ってる。うう、止められない。聞かれてる……）

「あんまり我慢する必要はないよ。女つてものは快楽に弱いから。うんこを食べられて感じるのも仕方ないんだ。も、もっと素直になってもいいと思うよ」

下腹の音に嬉しそうに瞳を細めながら、子供を褒めるようにこちらの頭を撫でてくる。

「ほら、感じているんですよ？」

「わ、わたしは……感じてなんかなひ」

決して認めることなどできない言葉だった。肉棒を咥えたまま否定する。

「頑固だなあ。そういうとこ音羽にそっくりだよ」

「ちがふわ」

これは頑固なんかじゃない。事実だからだ。母だつてきつとそうだ。感じてないから否定し、認めなかったのだろう。

（あり得ないのよ。こんなことで感じるなんて……）

再び意識をフェラチオに集中させる。

ちゅぱっ、くちゅっ、ちゅぱっちゅぱっちゅぱっ！

亀頭粘膜と口腔粘膜を混ぜ合わせ、カリ首を舌で締め上げながら顔を前後に振る。すると一扱きごとにペニスは大きさを増していった。それだけ感じているのだろう。

（あと少しだ）

「んふっ、ふうんんっ……んべろっ、んぢゅるう」

相手が感じていることが分かると嬉しい。自然と口戯は激しさを増す。

「ああ、いいよ」

絹川も快楽に夢中になっていようだった。

ただ、これに比例して下腹部がより熱くなっていく。汚物を吸引した触手が大きさを増し、腸壁を圧迫してくるのを感じた。ぎゅるるっという音も大きくなっていく。この圧迫感が与えてくるものは苦しみではない。全身が脱力するような感覚だった。

「んっ、ふんっ、んふううう……」

身体中を触手に舐め回され、ビクンッビクンッと身体が震える。身体の奥底から、熱い何かが湧き上がってくるような気がした。

自然と腰を前後にくねらせてしまう。

「ふーふーふーふー」

鼻息が荒いモノに変わっていった。

（か、考えちゃ駄目……。ぺ、ペニスにだけ意識を集中させるのよ。そう、これは気のせい。身体が熱いのは気のせいなのよ）

現実を否定する。感じているものを忘れる為に、更に意識をフェラチオに傾斜させていった。

「んちゅっ！　ちゅっちゅっちゅっ！　んべろお」

ただ啞えるだけではない。時折違う刺激を混ぜることで、より感じやすくなるのだろうと考えたヒツギは、肉棒を口から離すと、見せつけるように亀頭にキスをし、ハムツと甘く肉茎を嚙んだりもした。

「い、いいよ！　う、上手いよお」

これが功を奏したらしく、絹川は喜びの声を上げる。亀頭が空気を注がれすぎて今にも破裂しそうな風船のように膨れあがった。

（も、もう少しだ）

あと少しで終わる。

再びペニスを啞え、口唇で締め上げた。

瞬間――

「ふごっ！」

唐突に後頭部に手が回されたかと思うと、喉奥まで肉棒を突き込まれた。一瞬氣道が塞がれ、息が詰まる。

「さあ、沢山味わわせてあげるね……ウエヒ」

絹川はにたりと笑うと、乱暴に腰を振り始めた。

じゅづっ じゅづっ じゅづっ じゅづっ じゅづっ じゅづっ ！

「もっ！ ほごっ！ もっんもっ、んじゅっ、ちゅぶっ、むぶちゅう」

ズンズンッと喉奥を突かれる。頭を押さえつけられた状況では抵抗することも叶わずくぐもった声を漏らすことしかできなかった。

その上、この動きに合わせるように触手達の吸引が激しさを増す。全身を激しく吸い立てられ、直腸を汚物の残り滓まで吸われた。

（あ、あつつい……。身体の奥まで熱い。くつ、くるつしい。とま、止まつて。止まりなさいよお）

必死に視線で訴える。

が、絹川は気付かない。彼は快楽に夢中だった。やがてこれまでに以上に喉奥まで肉棒で突かれる。瞬間ペニスがビクビクッと震え――

「射精でるよおつ！」

どびゅっ！
びゅっびゅっ、どびゅるるっ！

「んもっ！ んもおおっ!!」

（や、いやっ！ 射精てる。口で射精てるっ!!）

口腔内に白濁液を撃ち放ってきた。ドクドクとポンプのように牡汁を流し込んでくる口腔内に苦みと熱気が広がった。

それと共に腸内の蟲も震えだし――

ぽびゅばっ！　ぶっびよろろっ!!

唐突に直腸内で蟲が弾けた。同時に熱液が体内に広がっていく。これは全身に取り憑いていた蟲も同様だった。すべての触手が破裂し、身体中に熱液を降り注がせる。

（な、なにっ!!　何か出て——あ、熱い！　何これ？　熱いい！　あっあっあっ、だ、だめっ！　く、来る。何か、何か来ちゃうっ!!）

腸内に、全身に熱気が広がる。弾けた触手の汁が、内臓に染み込んでくるのが分かった。汚汁が肌を侵食する。熱が全身を包み込んでいく。

（駄目よ。これは抑えないと駄目えっ!!）

熱気の中に意識が蕩けてしまいそうだった。それをヒツギは必死に抑える。ペニスを咥え、口腔に白濁液を溜めたまま——

「んっ、んんんんん」

ビクビクッと身体を震わせた。

キウウツと背中が反った。太股同士を擦り合わせる。眉根が切なげによった。ジュワリツと陰部が熱を持つのが分かる。脱力していく全身……。

「はああああ……ウエ、ウエヒヒ、よかったよお」

この姿を見つめる絹川は嬉しそうにそう呟くと、ジュボツと口腔から肉棒を引き抜いてきた。

「うげほっ、げほっげほっ……うえええ」



たらだめえ」

括約筋に力を込めながらキュツと太股を締め、腰をくねらせる姿は、あまりに哀れなものだった。

「つ、ついた。こ、公園ついたあ……」

それでも何とか漏らすことなく公園まで到着する。全身を脂汗に塗れさせながら、公衆トイレを見てほつと安堵の笑みを浮かべた。

（トイレ。出せる。うんち出せる……）

そのことしか考えられなくなる。まるで散歩にはしゃぐ本物の犬のように、四つん這い状態のままトイレに向かって駆け出そうとした。

「うぐえっ」

が、首輪が引つ張られる。

「げぼっ！ ど、どうして？」

息を詰まらせながら、リードを引つ張る絹川に媚びるような視線を向けた。

「ごめんねヒツギたん。と、トイレに行かせてあげたいんだけど、そ、その前に一仕事しないと」

「ひ、一仕事？ な、なに？ なんなの!!」

「いやね、あそこにいる連中なんだけど」

公園内を指さす。視線を向けるとそこには十数人の若者がたむろっていた。年齢はヒツギと同じくらいだろうか？ 彼らは煙草を吸いつつ、くだらないことを話して笑っている。

「彼らがな、なんなの？」

「この為に僕が僕でおいたんた。さあ行こう」
そういつて歩き出す。

「や、だ、駄目っ！ こ、こんな格好で駄目え！」

当然リードが引つ張られる。この状態で彼らの前に出るなどあり得ないことだった。

「おゝい君達」

しかし制止の言葉は届かない。笑いながら絹川は少年達に声をかけた。

「ああ？ なんだ？」

「うわっ！ キモイおっさん」

「俺達になにか用かよ？」

少年達は絹川を見た途端、明らかに不快そうな表情を浮かべる。敵意を持った視線が向けられた。

「何ってその……。招待状は読んだでしょ？」

まったく動じた様子を見せず、少年達に問う。

「招待状……。あれ送ったのおっさんかよ」

「綺麗な女が奉仕してくれるって書いてあったけど……。こんなキモイおっさんってことは、

ありや嘘か」

「……舐めやがつて。ぶっ殺し——え？」

そこで一人の少年が絶句した。

「あ、どうした？」

「ど、どうしたつて……そ、それ見ろよ」

呆然としながら——ヒツギを指さしてきた。

「え？ あ……え？ せ、生徒会長？」

「ま、マジ？」

少年達が瞳を見開く。

（へ？ あ……こ、この子達……）

ヒツギも呆然とした表情を浮かべた。

彼らには見覚えがある。よく学校内で注意をする不良生徒達。

「そうだよ。きき、君達の生徒会長。か、可愛い牝犬だろ？」

「め、牝犬？」

「そうだよ。僕の牝犬……。ウエヒヒ、ぼ、僕の招待状……信じてくれたかな？」

驚く少年達に笑いかける。

「すげえ。あ、あの生徒会長がこんなエロイなんて……」

「見るよこのおっぱい。でけえ。た、たまんねえな」

「裸で犬みたいに散歩って……ド変態かよ」

ゴクリッとみんなが息を呑む。

「ウエヒヒ。そ、その通りだよ。こ、この子は本当に変態でね。ぼぼ、僕だけじゃ我慢できないっていうんだ。もつと沢山チンポ吸いたいつてね。ほら、できるよねヒツギたん」

「な、何を、い、いつて……」

最悪な提案だった。一瞬夢を見ているのではないのだろうかと思ふ。

「ウエヒヒ、みんなのをべろべろしてあげるんだよ」

しかし、ヒツギに向けられる絹川の視線はどこまでも現実だった。

「そんなことできるわけ……」

「やるよね？ や、やらないと……攫われた人達の行方捜索をやめちゃうよ」
どこまでも最悪な男だ……。

「ままま、マジかよ。せ、生徒会長がほ、本当にフェラしてくれるのか？」

「も、勿論だよ。さあ、ズボンを下ろして」

絹川の言葉に従い、不良生徒達はズボンを下ろす。この異様な状況に興奮しているらしく、彼らは皆ベニスを勃起させていた。

（あり得ない。こ、こんなのあり得ない……）

呆然とする。身体が硬直した。

「さあ、やってあげて。ほら、やらないとトイレにも行けないよ」

パンツと尻を叩いてくる。

「ふひっ！ んんんん」

拒否権などなかった。

ぺたぺたと四つん這いのまま不良男子の一人に近づいていく。

（嘘でしょ？ こ、こんなことしちゃ駄目よ。だって、あ、相手は同じ学校の生徒なのよ！）

理性が悲鳴を上げた。

だがやる以外に道はない。

口奉仕しなければ絹川がみんなを探してくれない。エネルギー補充もできない。それでは世界が守れない。今までの行為が、母の戦いが、すべて無駄になってしまう。

「ほら、やらないとトイレにもい、行かせてあげないよ。そ、それでもいいの？」

逃げ道は完全に塞がれていた。

（し、仕方ないじゃない。こうするしかないんだから。だから仕方ないじゃないっ!!）

目の前に肉棒が突き付けられる。ムワツと噎せ返るような匂いがした。

「そ、それじゃあ……い、いくわね……」

「そんない、言い方じゃ駄目だよ。こ、こういわなくちゃね。ウエヒヒ」

耳元でいべき言葉を告げられる。

「そんなこと……」

「いえるよね？」

拒否権はなかった。

「……こ、これから……み、皆さんのお、おち……オチンポに……ほ、奉仕させていただ
きます……」

絞り出すように屈辱の言葉を口にする。

「お、オチンポって……生徒会長が……。マジかよ」

「変態大人だな」

ゲラゲラ男達が楽しそうに笑った。

（だ、黙って……黙りなさい……こうするしか。こういうしかないのよ……）
いいたいことは多々あった。けれど何もいうことはできない。

屈辱と便意に耐えながら、唇を肉先に寄せ――
ちゅうつ。

キスをした。

「おおっ！ マジで！ スゲえっ!!」

感動の声を不良生徒が上げる。

（……こんなのなんでもない。なんでもないわ）

届く声に心にヒビが入りそうだった。

これを抑えて、チュッチュッチュッと繰り返し啄むように口付けする。肉茎はキスをす

るたびにビクビク震えた。

当然キスだけでは終わらない。唇を開き、舌を伸ばす。チロツと肉先を舐めた。塩気を含んだ味が伝わってくる。

「んちゅっ、ちゅばっ、ちろっちろっ、んちゅう」

アイスでも舐めるみたいにぺろぺろ肉棒を舐め、遂には――

「んもっ！ ふもおっ」

これを咥えた。

「せ、生徒会長がお、俺のを咥えてる。た、たまんねえ。こ、こんなの我慢できねえよ」
喉奥までペニスを咥え込む。

「ふうふう……。ふちゅっ、ちゅぶっ、くちゅぶう」

口腔を窄める。舌先を鈴口に這わせ、ぺろぺろ舐めながらこれを啜った。

「そ、それすっげ、で、射精るっ！」

するとすぐに男子は限界を告げる。ビクンツと口腔内でペニスが痙攣し――

どびゅぶっ！　びゅぶぼっ！　どびゅるうっ！！

「んもっ！　ぶっ、ふぶおっ！　うえっ、うええ」

白濁液を口腔内に撃ち放ってきた。反射的に吐き出してしまう。口回りが汚液でドロドロになった。

「ああ、最高だったあ」

「おめゝ早すぎ」

「つ、次はオレだあ！」

我先にと肉棒を突き付けてくる。ヒツギに対する氣遣いなど、どこにもなかった。新たな肉棒が突き出される。

「……ん、ふちゅう」

一瞬迷ったけれど、ギュルルツとなる下腹部の音にせかされるように、これを咥えた。先程よりも大きなペニス。

「んちゅつ、べろつ、ちゅつちゅつちゅつ」

まずは口付けをする。何度も肉棒にキスをした。勿論それだけでは終わらない。舌を伸ばし、裏筋を舐め上げる。舌先でなぞるたびに、肉棒はピクピクツと反応を示した。

やがてペニスは唾液に塗れる。最初に舌を這わせた時よりも、更に大きさを増していた。「す、すげえ。せ、生徒会長なんか手慣れてない？」

「チンポ好きの変態かよ。幻滅だなあ」

口々に勝手な言葉を向けられる。

（ち、違う。わ、私は変態なんかじゃない……）

自然動きが鈍った。

「ウエヒヒ、どうしたのヒツギたん？ 早くしないと間に合わなくなっちゃうよ」
だが、休んでいる暇などない。

(こ、こうするしか……こうするしかないのよ)

必死に自分自身に言い聞かせながら、口を大きく開き、ペニスを咥える。

「んもっ、おっ、んぶおお」

顎が外れそうなので、肉先だけ咥えるに止まる。

「や、やっぱり生徒会長はチンポ好きだったんだ。ああ、たまんね。口の中最高！ でも、もつと、もつと奥まで咥えてくれよ!!」

それだけで健全な男子が満足するはずもない。腰が突き出される。

「おぼっ！ んぶおおおっ!!」

喉奥まで容赦なく肉棒が突き込まれた。

「お、あつご、く、くつち、わ、わだつちのく、くちがざげぢやうう」

「こ、これ最高。ああ、マジ気持ちいい！」

突き込むだけでは終わらない。

じゅごっじゅごっじゅごっ！

「おぼっ！ むっむっむぼっ!! おっおっおおお」

容赦なく腰を前後に振ってきた。

まるで膣を犯している時のように激しいピストンが口腔を襲う。玩具のようにヒツギの頭は前後に振られた。

(く、くるっし、い、いきつが、息ができなつい。くつち、私の口……おか、……もつも

つもほっ……犯されてるう)

自然と溢れ出した唾液によって、口回りが淫らに穢れる。ドジュツドジュツと喉奥を突かれるたび、剥き出しの肢体がビクビクッと震えた。

「も、もう射精る。た、たっぷり飲めよっ!」

これまでに以上に喉奥まで肉棒が突き込まれる。龟头が膨れあがり――

ぶびゅばっ! どびゅっ! びゅぶるるるっ!!

「おっぽ! むぽっ、んぽおおお」

白濁液が放たれた。

(お、おぼれっる。せ、精液で溺れるう)

牡汁で喉奥が塞がれる。息が詰まった。しかし、肉棒を口腔から引き抜いてもらえないので、吐き出すこともできない。

「お……ん、ご、ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅう……。うぶえっ、うええええ」

ペニスを咥え、嘔吐えすきながらも白濁液を飲み干すことしかできなかった。

「うえっ、げぼっ、ハアッハアッハア……」

飲み終えたところでようやく肉棒は引き抜かれる。

「こ、今度は僕だあっ!」

「ふぶっ! むちゅうっ!」

間髪いれず口腔に肉棒が突き込まれた。

「俺も我慢できない」

しかも、今度は一本だけではない。もう一人残された男子が声を上げ、肉棒を突き込まれている口腔に無理矢理ベニスを突き込んだ。できた。

「んぶっ！　ぶううう！」

（む、むっり!!　に、二本なんて、ぜ、絶対無理い）

二本の肉棒が同時に口腔を犯す。

「おっ、むぼっ。や、やめっで、こ、こんらのだめえ……。ふうっふあああ」
肉棒を咥えたまま、必死に許しを請うた。

「うあ、き、気持ちいい」

「ああ、最高。これがフェラなんだあ」

懇願は耳に届かない。少年達は容赦なく腰を振り、容赦なく口腔に肉液をドブドブ流し込んだ。

「ぶっ！　んびよおっ!!」

二本同時射精。当然その分量は多くなる。ブクツと内側から頬が膨らみ、逆流した白濁液が鼻の穴からビュブツと噴き出した。

「見ろよこれ。鼻提灯できてるぞ」

無様な顔を晒してしまう。

「さあ、まだまだだぞ」



悔しいが絹川の能力は本物だ。

「……分かったわ……」

迷いの後、血の滲むような思いでヒツギは決断を下した。

エクスラグナに変身したまま、地下空間中央に存在するマザーの前に立つ。

途端に化け物はヒツギの身体に触手を伸ばしてきた。幾本もの触手が身体に絡みつく。グジュツと粘液で湿った感触が気持ち悪かった。

「●×■□■!!」

歓喜にも似た唸りをマザーは上げる。

「そのつの本能はとにかくは、繁殖することにあるみたいだね。せ、戦闘能力を失っても、ほほ、本能は消えないのかあ。と、とっても嬉しそうだ」

絹川の言葉通り、マザーは貪欲に絡みついてくる。ヒツギの腕くらいの太さがある肉触手が足首に、手首に、腰に密着し、獲物を締め上げる蛇のような動きをしながら、聖換衣の上を這い回ってきた。

にじゅつ、ぐじゅう……。

「聖換衣」に染みができる。気色悪いことこの上ない。

（まだ、まだ間に合うわ。い、今のうちなら逃れられる。こ、こいつを滅ぼすことだってできる……）

二の腕、太股に触手を感じる。力を解放し、マザーを吹き飛ばしたい衝動に駆られた。現在のマザーを倒すことくらい簡単にできる。しかし、それをすればみんなは——結局動くことなどできなかった。

「う、くっ……あつ。んんんん」

硬直するエクスラグナを嘲笑うように、身体中を肉紐が這い回る。細身の肢体が触手によつて宙に浮いた。

「わあっ！ おしっこしてるみたいだお！」

大人に後ろから抱きかかえあげられているみたいな体勢。両足がM字型に開かれる。

「み、見るなっ！ こんな見るなあっ!!」

あまりに屈辱的な格好だった。

「放せっ！ 私を放せえっ!!」

悲鳴を上げてもがくけれど、触手は肉体を解放してくれない。それどころか乳房にも絡んでくる。柔肉がギュウツと締め上げられた。柔らかな胸は簡単に形を変えられてしまう。螺旋を描きながら、母乳でも搾ろうとしているかのように蠢く触手。

「くっ！ む、胸をし、搾る——なあっ！ くっふ、んっ、か、感じるなあ!! ふひあっ！」
グジュツと乳房を潰されると、それだけで甘く、痺れるような感覚が走る。性感を知つてしまっている肉体が恨めしかった。

そんな自分を叱咤する。憎むべき化け物で感じるなど、あつてはならない。

「ふっぐ、感じない。わ、私は感じないっ！」

口を引き結び、嬌声を抑えながら、敵意で性感を誤魔化そうとするように鋭い視線でマザーを睨む。

だが、いくら視線に殺意を込めたところで、マザーは止まらない。本能が赴くままに、何度も何度も繰り返し乳房を絞り上げてきた。同時に太股を摩擦するように擦りあげて来る。

「に、にちゃんにちゃ吸い付いてくる。ふっあ！ ど、どうして？ さ、触られてるだけなのに、熱くなる。わ、私の身体があ、あつくなる!!」

「聖換衣」が粘液に塗れていく。触手に肢体を撫で回されるだけで、ビクッビクッと腰が震えた。

「きき、気持ちいいの？ マザーの愛撫いいの？」

絹川は瞳を爛々と輝かせながら、興味津々といった様子で尋ねてくる。

「き、気持ちよくなんか……な……いいっ!!」

「ホントに？ う、嘘ついちゃ駄目だよヒツギたん。ほ、ホントは感じてるんでしょ？ だって、ちち、乳首が勃起してるよ。ど、聖換衣」の上からでも分かるくらいに。相変わらずエッチな乳首だなあ。ペ、ペろペろしたくなっちゃうよ」

「だ、黙って！ こ、これはせ……はあはあ……せいりげんしよっうよ！ くっ……ふう……た、ただ、そ、それだけよ!!」

否定はするけれど、胸元は『聖換衣』の上からでもはっきり分かるくらいに勃起していた。

当然マザーもこれに気付く。うねるように伸びてきた触手の先端部が、花のように開いたかと思うと、容赦なく、右乳房に吸い付いてきた。

「ふっひあっ！ す、すうっな!! は、放せっ！ 放しなさいっ！ むっね、お、おっぱい吸うなあ!!」

身をよじってこれを振り解こうとする。が――

じゅずっ、ちゅずるるうっ!!

「や、やめっろ、おっぱひやめりよお！」

その行動を嘲笑うように、触手は乳首を吸引してきた。途端に稲妻のように性感が全身を駆け巡る。反射的に漏れる嬌声は、呂律が回っていないかった。

「だつめ、それだめえ！ おっぱひらめえ！ ジンジンする。乳首ジンジンしゅるから、ひやめてえ！」

慌てて静止するものの、勿論聞き届けられることはない。それどころこちらを弄ぶように、左乳房にも食いついてきた。

ぶちゅずっ！ ちゅっぱちゅっぱちゅっぱっ！

「んあっ！ こ、こんな、り、両方――両方なんへえっ!! あっあっ、んあああっ」

左右両乳首に対し同時に与えられる刺激に、艶やかな悲鳴を抑えることができない。

「あ、あれ？ す、凄く可愛い声が聞こえてきたよ。や、やっぱり気持ちいいんじゃない？
感じてるヒツギたん可愛いお♪」

ンフーンフーと絹川は鼻息を荒くした。

「ち、ちがつ！ そんなことないっ!! こんなことで、わ、私はき、気持ちよくにやんかならなひいっ!!」

必死に首を横に振る。

だが――

ぶじゅずつ、じゅずぶるっ。ぶじゅずずう……。

「ふっひ！ んんんん。は、はげっし！ あっあっあっ、ま、また、またおっぱいしゅうの激しくなっへきちゃあ!!」

まるでヒツギが強がっていることを理解しているかのように、マザーの吸引は激しさを増した。当然のように肉体を襲う性感も増幅していく。

ガクガクと膝が震えた。頬が紅く染まり、プルプルと乳房が震える。

「あっあっあっあぁあぁあぁ」

上がる嬌声が甲高いものに変わっていった。身体もより熱く火照り、乳頭が疼く。

「いい声だよヒツギたん。こんな声でも感じてないのお？」

「あ、当たり前、まへよっ!!」

耐えられる。絶対に我慢できる。これは必要だからやっているだけの行為でしかない。

だから快感なんか覚えるはずがない。

強く自分自身に言い聞かせる。

「嘘をついたって簡単に分かっちゃうんだよヒツギたん。だってほら……ヒツギたんのオマンコ、もうグショグショに濡れてるよ」

口でなんといったところで説得力などない。M字型に開かれた足。覗き見える〴〵聖換衣〴〵のクロッチ部分は、溢れ出す愛液によって濡れていた。肉襞の形が衣装の上からでも確認できてしまう。

「ウェヒヒ、お、オマンコが透けて見えるお！ く、クリトリスもオチンポみたいに勃起してるねえ」

肉体が心を裏切っているかのようにだった。

「こ、これは違う。違うのっ！ みな——んひっ！」

ヌジュツと触手の先端部が濡れる陰部に密着してきた。途端に乳房を締め付けられている時以上に、甘い愉悦が身を襲う。

亀頭のように膨れあがった肉紐の先端部が、ぐりぐりとクロッチ部に押しつけられた。

「んっく！ あっ!? な、にやに？ あ、あつひ!? これ……う、嘘？ どれしゅが……」
同時に先端部から肉汁が溢れ出す。熱気を持った液体が〴〵聖換衣〴〵のクロッチ部分を濡らした。途端にバトルドレスが落し始める。まるで水につけたトイレットペーパーのようだった。

「とっても興味深い液体だなあ。どんなせ、成分なんだろう？ おまんまん丸見えだよお」興味津々といった様子の絹川。彼が視線を向ける先は、晒された生殖器官だった。

「聖換衣」が溶けてしまったことにより、剥き出しになつてしまった恥部。晒された花弁はクパアツと淫靡に口を開いてしまっている。唾液のように溢れ出す愛液が、ポタポタと糸を引きつつ地面に向かって垂れ流れ落ちていた。肉襞の一枚一枚が、呼吸をするように蠢いている。

ヌチャツ——

「ひいっ！」

改めて肉触手が押しつけられる。伝わってくるのは生温かな感触。ドクドクと脈打っているのが分かった。血の気が引いていく。

楽しい絹川とは対照的に、ヒツギの表情は恐怖に凍りつく。

「いや……や、やめて……そ、しよれだけはやめて……お、お願い……」

これまでの陵辱とは違う。相手は化け物なのだ。醜く、醜悪な怪物に犯される——想像するだけで身が震えた。相手が憎むべきマザーだということも忘れ、懇願さえしてしまう。ぐじゅっ、ずじゅぐう——

「んっひ！ ひおお！ だ、駄目っ！ そ、それ以上は——んおっ！ おっ、ほおおおっ！ お、おおきすぎっ！ こ、こんなのい、いやっ！ いやあああっ!!」

しかし、化け物に言葉は通じない。化け物に慈悲はない。

「逃げちゃ駄目だよ。能力を使うのも禁止。わわ、分かってるよねえ」

逃げ道も塞がれていた。

みじつ、みじみじみじつ！

「おっ！ ふほおおおっ！ こ、こんなの、さ、裂ける。わ、私のアソコが裂けるうっ！」
巨棒の先端部が膣口を押し開く。胎内に化け物が潜り込んできた。

膣道が押し広げられていく。身体に巨大な穴を開けられているかのような感覚だった。

「おっおっおっ！ む、無理。も、もうそれ以上はは、挿入らない！ 無理にやのお！
もう、だ、駄目だからあつ!!」

穿たれる巨大な杭のようにすら感じる。息が詰まった。痛々しいまでに瞳を見開き、ブンブンッと首を左右に振る。

「無理とかいっちゃ駄目だよお。ま、まだ頭しか挿入ってないんだからあ。が、頑張つてね♪ ほ、ほら、そんなに苦しそうな顔しちゃ駄目だよお。わわ、笑わないとハッピーが逃げちゃうよ。スマイルスマイル♪ ウェヒヒ」

「あ、頭しかつて——ふひっ！ おっ、うっそ。ま、まだ、まだ挿入ってくる!! おっおっおっ、おっく、奥までくる。駄目。そ、それ以上奥は——おっ！ ほおおおっ!!」
ぐじゅっ、ぶぐじゅっ！ じゅずぽおっ!!

更に膣奥まで触手は潜り込んでくる。膣奥まで辿り着いても終わらない。子宮口を押し開き、子宮壁をズンッと叩いてきた。

瞬間、目の前が真っ白になる。全身から力が抜けていくのを感じた。
じよぼつ、ぼじよろろお。

「や、お、おじつご、おじつごも、漏らしちゃってる。いやっ！ いやあああ」
同時に膀胱が押し潰され、ヒツギは失禁した。

「止まらない。お、おしつこ止められないの。お。見ないで。こ、こんなのにやいでよ」
自分の意思では排尿を止められない。小便を撒き散らしながら、駄々を捏ねる子供のよう
に悲鳴を上げることしかできなかった。

（犯された。こんな、こんな化け物に犯されちゃったよお……）

涙が溢れ出しそうだった。

そんな絶望を覚えるヒツギに与えられる試練は、当然これだけではない。
ぐじゅつ、じゅぐるつ！ ぶじゅぐるう。

「え？ あっ、んんんん！ お、う、動いてる。う、動くな。私の膣中で動くなあっ！！
内臓——私のにやいぞうが引つ張られる。あつ、ふひあああ」

子宮壁を叩いた肉触手は、すぐにピストン行動を開始してきた。

膣奥から巨棒が引き抜かれていく。膨れあがった先端部がカリ首のように肉壁を引っか
け、引つ張ってきた。子宮そのものが外側に引きずり出されてしまうのではないかと思う
くらいの刺激を覚える。

ビクンツと肉体が震えた。ジュワアツと愛液が溢れ出す。



痛みではない。愉悦を含んだ官能の刺激だった。

「どうじつで、なんで、はあはあ、あ、熱くなる！ あづくなるう!! どうじで、ばげものなのに、あいではばげもろにやのにいっ！」

漏れ出す悲鳴には淫靡な吐息が混ざる。

「あれれえ？ 気持ちよさそうだなあ？」

「ち、違う！ ぢがううっ！ 感じてなんか——あつ、んひっ！ ふほおおっ！」

全身が肉悦によつて弛緩していた。酷すぎる陵辱だというのに、僅かに肉触手が蠢くだけで全身が蕩けそうな感覚を覚える。

それでも認めない。母の仇である醜き化け物によつて性感を与えられているなど、絶対に認めるわけにはいかなかった。

「ホント頑固だね。ウエヒヒヒ。でも、そういうところがと、とつてもヒツギたならしくてかいいいよお♪ でも、い、いつまで我慢してられるかな？ ほら、い、一本だけだと思つたら大間違いだよ」

「——え？ あ、ひっ!? 嘘？ う、後ろも？ む、無理よ。は、挿入らない。そんな大きいので、絶対挿入らないいっ！」

ぬじゅっ、ぐじゅずっ、ぶじゅぐるう。

伸びる触手の数は数十本。そのうち一本で膣を犯すだけでは満足しない。新たな触手が肛門に密着してきたかと思うと、無理矢理肉穴を拡張してきた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元
ドリームマガジン
ED DREAM MAGAZINE

成人向け雑誌

今月の特集
公開調教

偶数月
17日発売

2013年6月17日

淫魔の姫騎士ジャンヌ
うさぎ原智恵
カグユツ
淫魔の姫騎士ジャンヌ
うさぎ原智恵
カグユツ
淫魔の姫騎士ジャンヌ
うさぎ原智恵
カグユツ

二次元 ドリームマガジン ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

コミック O M I C
UNREAL
アバウト

06 2013 JUNE
price 680yen
祝・7周年!

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

Hisasi
エロトミサの
ドモセシオンサク

不思議の海へ
飛び込んで

奇数月
12日発売

2013年6月12日

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

絶好調コミカライズ!
対魔忍アサギ3
高浜太郎 原作 Anime Gith
不良っ娘エロバトル!
ばんかラブ!
歌麿

クメライン
MEGAMI CRISIS

奇数月
下旬発売

ヒロインが
ちまくるアンソロジー!

歌麿

コミック O M I C UNREAL アバウト

メガミ クライシス MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は
購入できません。